

2015 年度 学術交流支援資金報告書

海外の大学等との共同学術活動支援

大学院プロジェクト科目名： 現代社会文化論プロジェクト

研究課題:

学術交流の多様化に伴うネットワーク構築

ー ドイツ語圏拠点形成の見直しと再構築 (1)

研究代表者氏名： 藁谷 郁美

所属／職名： 総合政策学部兼政策・メディア研究科／教授

研究概要

グローバル人材の育成を推進する流れのなかで、従来のやり方で遂行してきた共同学術交流のあり方には既に多くの問題が累積する。背景には変容する交流の多様化と枠組みの硬直化がある。特定の拠点のみを対象とした学術交流は、2 極点を交流の基本として双方向性を重視する傾向が強い。この点が、多分野横断型の人材の受入・派遣に対応し難い状況を生み出していると考えられる。2009 年に政策・メディア研究科がドイツ州立ハレ・ヴィッテンベルク大学と締結したダブルディグリー交換協定(修士)は今年度で見直しの時期をむかえ、これまでの実績をふまえて、新たな共同学術交流のあり方を検討する必要性に迫られている。本取り組みでは、問題の所在を可視化し、今後のあらたなネットワーク形成の拠点づくりを検討する。

研究組織 (1 名)

代表者：藁谷郁美 総合政策学部兼政策・メディア研究科 教授

コンテンツ作成、運用のための作業

1. 本取り組みの背景と目的

2009 年度に、政策・メディア研究科が文学研究科と共同でドイツ州立ハレ大学大学院 (Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg) とダブルディグリープログラム(修士号)を締結し、現在に至るまで政策・メディア研究科から計 3 名 (2012 年度 1 名、2013 年度 1 名、2014 年度 1 名) の学生を派遣してきた。2015 年度には、本ダブルディグリー取得者が

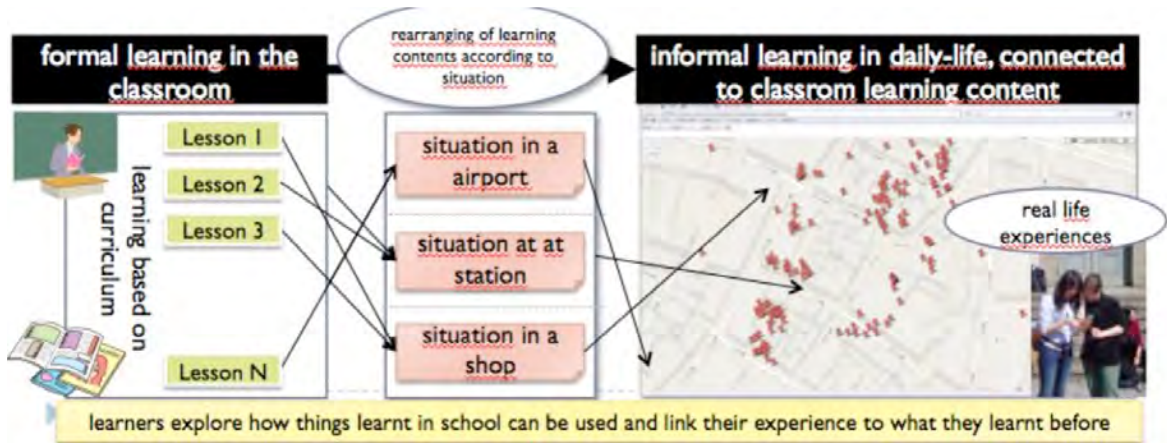
1名増える予定である(2016年3月にドイツ側からの通知をもって修了予定)。しかしこの制度では、慶應義塾側の受け入れ先は日本語・日本文化教育センターの日本語コースに一本化されており、双方向性をもつ交流活動が遂行できない状況が続いている。2015今年度は本プログラム見直しの時期にあたり、今後の提携先をあらたに構築するための転換期を迎える。全塾レベルで掲げる推進政策の重点領域のひとつ、グローバル人材育成は、政策・メディア研究科の留学生受け入れおよび派遣拡大へと同一の方向性を示すものである。特に欧州圏との大学院レベルでの交流基盤が未だ磐石とは言い難い政策・メディア研究科の人的・学術的ネットワークは、キャンパス全体の問題として取り組むべき課題であると考ええる。

上記に述べたこれまでの問題点および背景をふまえて、a) あらたな学術交流構想の立て直し、b) 交流先の多様化、c)学術交流内容の多様化を早急に検討することが必要である。

2. 手法および検討内容

上記 a)~c)に掲げた検討内容は、これまでの研究活動実績の結果をふまえて遂行することを予定している。a)の学術交流構想は、特に従来の日独ダブルディグリープログラムにみられた受入・派遣の没双方向性を見直し、より幅広い分野での大学院生および研究者の有意義な交流活動の実現を目指す。表層的な双方向性を排し、「協働活動として」の具体的な分野横断型交流を重視することが必要である。本取り組みの準備内容として、分野横断的視点からの国際交流活動は継続している。主なこれまでの取り組みとしては、2008年度から2011年度にかけて文部科学省による「質の高い大学教育推進プログラム」(質高 GP)の助成を受け「ラーニング・デザイン・プロジェクトにおけるユビキタス体験教育環境の利用実験と検証」という課題のもと、ドイツ語学習環境設計研究を遂行した(事業推進責任者:徳田英幸)。その継続研究活動として、2012年度より2014年度までの3年間、科学研究費助成事業の補助により「体験連動型ユビキタス・外国語教育メディア自動配信システム国際的実利用環境構築」(研究代表者:藁谷郁美)を遂行してきた(図1)。これら一連の研究活動は多様な研究領域(外国語教育、データベースシステム、ユビキタスコンピューティング)の分野横断型協働(共同)研究活動として進められ、学部生から大学院生、そして研究員までの多様な人材が国際交流につながる形で形成されてきたものである。今後、政策・メディア研究科の各プログラムが提示する多様な分野が、受け入れの可能性となりうることは、b)およびc)の実現に向けて、じゅうぶんな準備段階にあることを示すものとする。

図 1: 体験連動型ユビキタス・外国語教育メディア自動 配信システム国際的実利用環境構築の全体図



具体的な実現内容としては、ドイツ語圏の大学・研究機関等と共同形態で運用する授業の開講(現行の学部授業の拡大)、大学院開講科目「e 科目」の拡大利用、大学院フィールドワーク科目への協働学習機能付与などが挙げられる。すでに学部レベルでのタンデム学習導入(ドレスデン工科大学およびハレ大学とのドイツ語インテンシブコースを対象として毎学期導入されている協働学習)、海外研修科目(毎年、夏季および春季学期休暇期間に遂行するドイツ語圏での短期語学研修) およびフィールドワーク科目(夏季および春季学期休暇期間に学生が個別にドイツ語圏で遂行するフィールドワーク活動)等の活動を可視化し、個別の活動内容をデータとして蓄積しているが(図 22)、これらの短期ドイツ語圏派遣先大学を、今後の大学院レベルでの交流基盤のネットワーク構築の手がかりとして開拓することが考えられる(<http://dmode.sfc.keio.ac.jp>)。



図 2: 左)海外研修先マッピングシステム「d-map」 右)フィールドワークブログ

3. 現段階の実績および今後の課題

上記 1.および 2.に記述した教育および研究の両側面でこれまで遂行してきた実績・経験の蓄積は、今後のあらたなネットワーク形成づくりに向けて、重要な準備手段として機能することが予想される。特に、これまでおこなってきた言語学習に重点を置くドイツ語圏との交流拠点と並行して、より研究推進につながる交流拠点の形成に拡大することが目標である。その際、特に多様な研究領域を交流のネットワークに取り込み、双方向性をもった拠点ではなく、多地点を複合的かつ柔軟な形で結ぶ共同体形成の拠点づくりに視点を転換・拡大することが重要であると考え。分野横断的な研究活動の交流は、今後、交流言語の多様化、交流文化圏・地域の拡大にもつながることを想定する。

具体的な拠点形成のための取り組みとして、以下の活動が挙げられる：

1) ドイツ州立ボン大学との交流のプログラム化

ボン大学は慶應義塾大学の交換協定校であり、並行して SFC の総合政策学部・環境情報学部との間で開始された春季ドイツ語海外研修コースへの学生派遣は、2013 年度より全塾レベルでの公募として拡大・定着している（慶應義塾大学国際センターHP 参考サイト：http://www.ic.keio.ac.jp/keio_student/short_prog_external/bonn_springprogram.html）。2014 年度には、代表者である藁谷と当時の教務担当課長（中峯氏）の公式な訪問をおこない、国際センター所長および関係各課、日本学研究所との懇談をおこなっている。今年度は、本研究資金の支援を受けて、2016 年 3 月に再度正式訪問を予定している。主なスケジュールは以下の通りである：

3 月 7 日：ボン大学学長との懇談：Prof. Dr. Michael Hoch

3 月 8 日：同大学国際センター所長との打ち合わせ

：同大学国際センター協定校担当者とのうちわせ

Christina Timpernagel 氏、Tina Odenthal 氏

：同大学協定校（Western Michigan University）との懇談会

Prof. Dr. Olivia Gabor-Peirce

3 月 9 日：同大学日本研究所の訪問

（Prof. Dr. Reinhard Zöllner 氏、Prof. Dr. Harald Meyer 氏）

3 月 10 日：同大学文献管理責任者 Prof. Dr. Becker 氏と打ち合わせ

本取り組みは、短期間で成果を完結しうる課題ではなく、長期的な維持・継続をもって遂行することが不可欠である。そのための基盤形成の第一段階として、今年度の活動をドイツ語圏ネットワーク形成への取り組みに位置付ける。総合政策学部および環境情報学部の重要な学部教育の柱の1つである外国語教育が、研究分野のレベルにおける交流拠点形成の契機として位置づけられることで、政策・メディア研究科における研究レベルの交流拠点につながっていくことを目標とする。

2) オーストリア州立クラゲンフルト大学との交流

本大学との交流はこれまで例がなく、2015年8月1日に藁谷が国際センター担当者と打ち合わせをおこなった。

Elena Buffa 氏 (International Office, Alpen-Adria Universität Klagenfurt)

Andrea L. Pirker 氏 (Sprachenzentrum/ 言語センター, Alpen-Adria Universität Klagenfurt)

すでに同大学では夏季ドイツ語コースを開講しており、今後の学生の派遣の検討が可能である。コース内容および期間調整等で今後の検討が必要であろうと考える。

3) オーストリア政府認定ドイツ語検定試験センターとの交流

クラゲンフルト大学の関連機関として、2015年8月1日に藁谷がオーストリア・ドイツ語検定試験研究所 (ÖSD) を訪問した。

Dr. Manuela Glaboniat 氏 (同研究所所長)

Alexander Kleinberger 氏 (同研究所 アジア圏人材育成担当)

ドイツ語検定試験の受験を通じた学生の交流も視野に入れ、同時に言語能力の評価研究においても今後の研究者レベルでの交流が考えられる。

4. 関連する主要な学術的成果

1) Ikumi Waragai, Shuichi Kurabayashi, Tatsuya Ohta, Marco Raindl, Yasushi Kiyoki, Hideyuki Tokuda: Context-awarewriting support for SNS: Connecting formal and informal learning. In Proceedings of EUROCALL

2014, pp.15-16, Aug. 2014, Groningen, Holland, 2014. 2) Ikumi Waragai, Tatsuya Ohta, Marco Raindl, Shuichi Kurabayashi: An Experience-Oriented Language Learning Environment Supporting Informal Learning Abroad. Educational Technology Research, vol. 36, pp. 179-189, 2013. 3) Marco Raindl, Tatsuya Ohta, Ikumi Waragai: Brücken in den Alltag- wie können digitale Lernumgebungen das Lernen beim Aufenthalt im Land

der Zielsprache unterstützen? Neue Beiträge zur Germanistik, Bd. 12 / Heft 1, pp. 92-111, 2013. 4) Ikumi Waragai, Marco Raindl, Tatsuya Ohta, Shuichi Kurabayashi: Deutsch auf der \square pur – eine intelligente Lernumgebung zum erfahrungsbasierten Lernen im deutschen Alltag. In Proceedings of "15. Internationale Tagung der Deutschlehrerinnen und Deutschlehrer 2013 Bozen", p.102, Juli 2013, Bolzano, Italy, 2013.